

## 「日本語の魅力」

### グリガト・ヤン（ドイツ）

一昨年と去年のワーキングホリデーの期間も含めると、私の日本滞在も今月でちょうど一年になった。来た当初から今まで、季節も、天気も、住む都市から友達までみな常に変わってきたが、いつも変わらないことは初対面の時に日本人から聞かれる質問である。

「へー、日本食が食べられますか？」

「あれー、お箸を使えるんですか？」

「すごー、ひらがなも読めるの？」

このような質問を何度も何度も耳にしたのは私だけではないだろう。未だに「日本に生まれていなくて、大和魂を持たないよそ者には日本の奥深い文化を理解できるはずがないだろう」という様に外国人を扱う日本人は少なくない。

確かに日本文化は、飛鳥時代に起こった「日本」という国の曙から、中世、近世、近代にわたって現代に至るまで続く幅広い文化である。その全体を大まかに、いや、ましてや細かいところまで理解することは、私のように長い間日本と無関係だった外国人にとっては非常に難解なことには違いない。しかも元々文化とは、異なる国民性と考え方、それらに基づく根本的な概念と、その考え方によって強い影響を受けて作り上げられたものである。この異文化をどう理解するか。これはかなり大変なことである。

しかし、その相違を超える強力な手段が一つあると私は思っている。それは「言葉の学び」だ。

20世紀前半の最も顕著な言語学者とされるウィトゲンシュタイン氏の名言が今でも私の記憶に残っている。「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する。」つまり、人間は特定の言語で考えなければならないが、その言語には限界がある。ある特定の表現、文法、構

造しかないからこそ、そこにはない表現は結果として「考えられない」ことになる。この提題を明らかにする有名な例としてアマゾナス州に居住するピダハン族の話すピダハン語が挙げられる。エヴェレットというアメリカ人の宣教師が最初にピダハンにキリスト教を教えようとしたときに驚いたのは、彼らの言語には「一つ」と「二つ」以上の数詞がなかったことだ。どんなに努力して数えることを教えようとしても結局できなかつたそうだ。

これにより言語学者のなかで激しく議論された「思想の範囲は完全に自分が話せる言語によって変わるものだ」という仮説が証明されたのではないだろうか。

ところで、最初に述べたよく日本人に聞かれる質問にもどるが、もう一つ定番がある。

「日本語を勉強するきっかけって何ですか」

というものだ。きっかけを言うのだったらほとんどの欧米の若い子と同じように「アニメが気に入ったから」と言える。しかし日本語の勉強で何度も迷ったり、諦めようと思ったりしたことがあったのに結局数年間も続けてこられたことにはまた別の理由がある。先に述べたピダハン語だけではなく、どんな言語においても表せる表現には限りがある。よって、私の母国語に当たるドイツ語で表現できることにも果てがあるのは言うまでもない。その点から見ると、日本語のようなドイツ語とかなり違う言語を身につけることは、私自身の視野も広げるという副効果があるのではないだろうか。さらに詳しく、日本語の最も気に入っている特徴を5つ紹介しようと思っている。

まず最初に、中国語の影響を抜きにして日本語の成り立ちは語れないだろう。中国語由来の言葉と云ったら、四字熟語がその中の典型的なものだと思う。「昔のことをしっかり勉強した上で、現在の世の中の様子が分かる」。これは、いい教えに違いないが、少し長いかな。では、「温故知新」にしたらより風流な言い方になったのではないだろうか。「勉強にも他の活動にも両方一生懸命取り組もう」を「文武両道」に直したら、なんて迫力のある表現ができただろう。「今度はいつ会えるか誰にも分からないので、今の出会いを最後の出会いと思って大事にしましょう」を「一期一会」にしたら、茶道の根本原則をたったの4文字で意

味することができる。この任意に選んだ例のように、特定の教えや原則、アドバイス等を4文字に略した形で表した四字熟語は多くの日本語学習者にも愛されている。私の最も愛用する四字熟語は何か。一つに決めるのは難しいが、もしかしたら「連続休日」に当たるかな。

二つ目だが、日本語には少し曖昧な表現が多い。但し、それをよく言えば、日本語は非常に「奥ゆかしい」言葉とも言えるのではないだろうか。ある逸話によると、夏目漱石が英語の「I love you」を翻訳したときにこういうふう述べたそうだ。

「日本語だったら、やはり単刀直入に『愛してる』というよりも『月が綺麗ですね』のほうが通じるだろう」と。日本文学の最高峰とされる源氏物語も同じ理由で未だに多くの人に愛されている。もし源氏物語に登場する露にぬれた草木や咲いたり散ったりするあらゆる花、鳴いてる蝉といった魅力的な恋の隠喩を、なくしてしまったら、それはただの退屈なラブドラマになってしまうではなかろうか。源氏物語ばかりでなく他の日本を代表する小説の特徴とされるのは、人間を肉体的に描写するよりも、ある人が着ている服装でその人の性格や気分まで表すことだ。私が最初翻訳で川端康成の「雪国」を読んだときにはその衣装の細かい描写に本当に驚いた。

三つ目は日本人の根底に流れるきめ細かな「心使い」である。まず日本語はどのような言葉で自分の気持ちやあらゆる風景、情緒を表すかということ、自然に関係する言葉が非常に多いように思う。もちろんドイツ語にも自然に関係する言葉が少なくはない。例えばドイツの風景といえば深い森が一番代表的なイメージではないだろうか。したがって、昔ながらの文学を熟読すると森に関連する言葉が非常に多いことが分かる。一つの例として

[Waldeinsamkeit]という表現だが、「一人で森の奥に居てその際に感じる寂しさ」という極めて翻訳にくい言葉が挙げられる。では、日本語の場合は、何が特に多いだろう。やはり雨に関連する表現が一番目立つのではないだろうか。「ぽつぽつ」「ざーざ」「しとすと」等のあらゆる雨の種類と音を描写する擬音語に限らず、五月雨、時雨や春雨のような名詞として使われる言葉も非常に多い。辞書で調べると細かい違いで分ける雨の様々な様子を表す表現が見つかる。四時を過ぎて降る雨を「七つ上がり雨」、晴れたのに雨が降ることを「天泣」

や「狐の嫁入り」という。こういう言葉が存在するのは、たとえ会話ではめったに使わなくても素晴らしいことだ。日本の文学、特に詩を読めば読むほど雨の他に季節を意味する表現も数限りないことがわかってくる。それは昔ながらに使われる雨水や清明などの二十四節気をはじめ、それぞれの季節を強く感じさせるかき氷や花火のような風物詩にまで至る。

また日本の詩という長い間使い継がれた形がいろいろあるが、その中でも俳句が一番有名だろう。外国にも高く評価される俳句は、世界中で最も短い定型詩として知られている。適切で洗練された言葉が器用に使われており、たった17音で、まるで一瞬に吹く花嵐の如く、ささやかな情緒を感じさせる。そしてもう次の瞬間には風に乗せられてあっという間に消えてしまう。松尾芭蕉の「夏草や兵どもが夢の跡」。あー、諸行無常の響きではあるまいか。何も説明しようとしていないからこそ、想像力を働かせて人生のはかなさを直感で感じさせるものだ。

これらの例を通じて日本人は本来非常に細かいところまで気がつく国民であることがよくわかる。それは言葉に限らない。例えば平安時代の公家だったら手書きの書が少し汚いばかりに常に恋愛関係で振られることも少なくなかったことだろう。また日本は「道」に気をつけることを極めて重んじる。茶道なら、見た目は易しそうなお茶の点て方であるが、たとえば十年、二十年修行しても、技を完全に極める時は来ないだろう。居合道だったら、何十年も刀を一気に抜刀し納刀することを研修しても、気をより効果的に使うことには永遠に取り組める。ある剣道の範士が「50年間の練習で基本を修めて初めて本当に剣道を練習し始めることができる」と述べたそうだ。この言葉を知ったのはもうかなり前だが、未だに畏敬せざるを得ない。

4つ目として日本語の受身と自動詞の使い方がある。日本人の性格と心のあり方を説明するとき、このポイントがよく指摘される。「みんな、来て！私にご飯をつくってあげたよ。」という台詞は、内容的にも文法的にも合っている…といってもこのように家族を呼ぶ主婦はいない。自分がどんなに努力しておいしいご飯を作ったのであっても、必ず「ごはんができた」と言うだろう。新婚の夫婦が結婚を強く求めて自分達で決めても「結婚することにした」

よりも「結婚することになった」のほうが自然な日本語ではないだろうか。日本人はどちらかという、自分を主体にして主語の動作によって環境をかえることよりも、自然に何かが起こるといふ知覚が強いそう。

さて、このエッセイで最後に紹介しておきたい特徴は同音異義語だ。このおかげで日本語ほど言葉遊び、いわゆるだじゃれを作る可能性を持つ言語はほかにないだろう。私はもともと言葉で遊ぶのが大好きでいつも新しく面白いだじゃれを集めている。「アルミ缶の上にあるミカン」は特に気に入った。その上、英語と日本語を両方含んだバイリンガル言葉遊びまである。さて、女子高生が動物園に行って、そこで蛇を持ち上げてぐるっと回すことを何というだろう。しば

らく考えたら、分かってきたかもしれない。答えはヘビーローテーションだね。

日本語が上手と言われても実はまだ、勉強すればするほどどんなに知らない日本語の面があるかを思い知らされる。

「文法ニモマケズ漢語ニモマケズ」と、これからも日本語の勉強に一生懸命取り組もうと思っている。